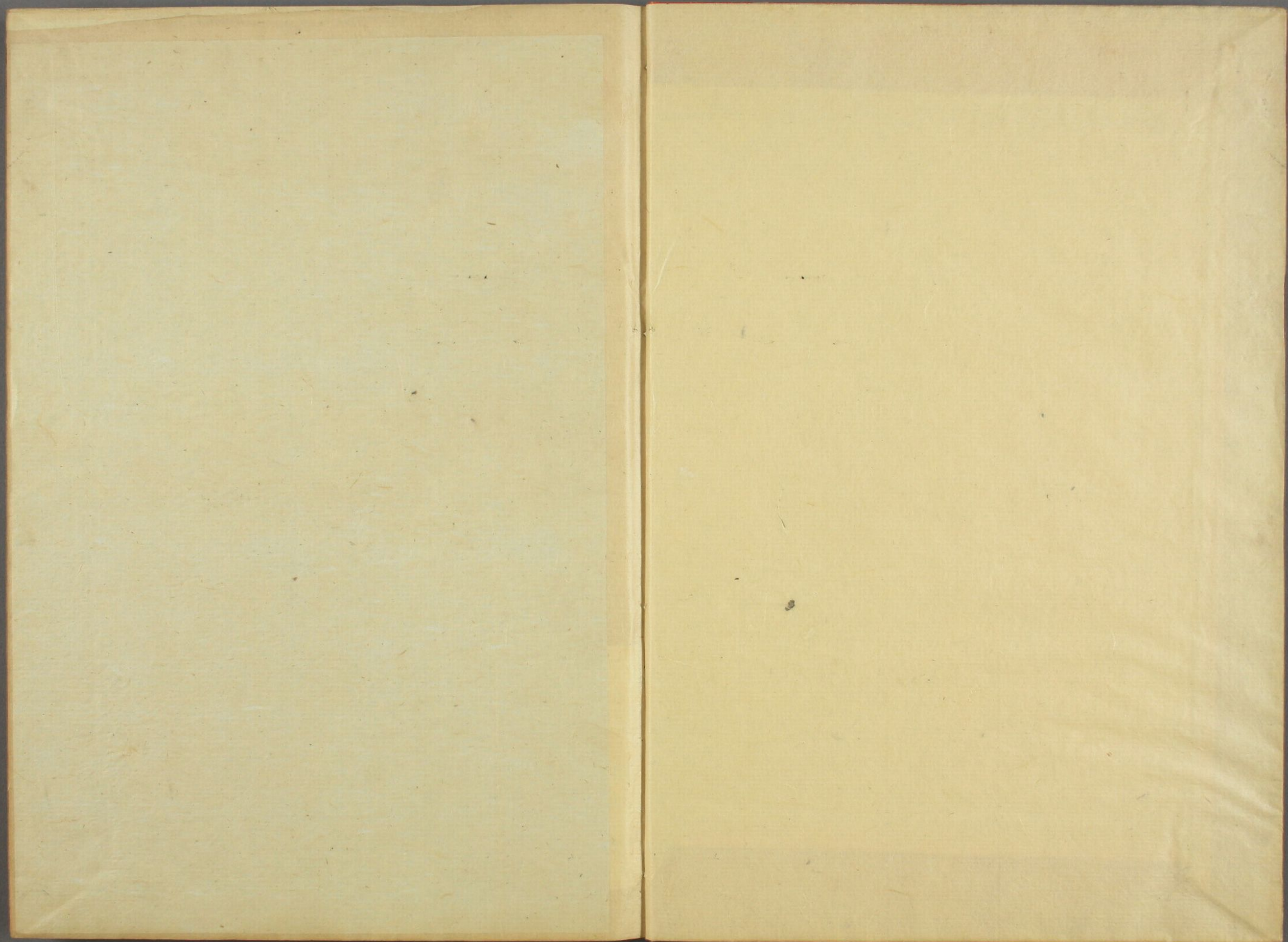




秋葉拾葉集

廿二日







扶桑拾葉集卷第二十二

目錄

志ら加ふれり日記

藤原基綱

谷並槐室澄卿御月和歌序

同

谷並槐室澄卿御月和歌序

同

弓り草乃紀跋

同

世鏡抄序

友原公藤

世鏡抄序

藤原冬良



新百人一首跋

釋道真

夏后紀

釋岸柏

三愛記

同

雷乃飲西芳寺遊つら待

多良良義無

高井の御所り跋

菅原和長

扶桑拾葉集卷第二十三

參議從三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

志かき承乃日記

或曰志かき承乃日記

藤原基綱

夫至孝乃道と云域の唐堯虞舜と
志かき承乃日記と云つる本朝の明王聖主と
是を純也と云ふやいと云ふ新氏は獨
尊と云利の女居す洵やれありの徳
と云ふを賀茂は靈神と云ふ長安は同藤子
下は御祖れと云ふ志かき承乃日記
と云ふ承乃日記と云ふと云ふ承乃日記

ありて孝と云ふは、
日文と云ふは、
不承、延治二年卯月下乃八日の國母仙
院の三回、聖忌、女六日、五ヶ日、御
八講と云ふは、
天曆九年正月、皇太后、德子、
宸筆と云ふは、
るは、
ヶ夜、
元曆、
後鑑、

やありて、應仁乃乱、
よ公私諸家の文書記録、
火魔鬼乃、
一毛と得、
の始、
此れ荒、
貴と織、
武運の、
乃と神、

見ざるもくわんにゆふえくたうくそくゆわん
多此三つと大壇乃と小壇と多しとこれ
乃とあるしとくわん螺鈿乃香瓶の机一脚
とくわん金銅の花瓶とくわんこれにくわん
とくわんこれあり螺鈿の机二つとくわん唐錦
とくわん佛供と具柄又座とんくわんこれと
乃とあり錦とあり御経一部十巻と
とくわんこれあり燈臺とくわん九枝の
花薬とありとくわん八講乃香瓶とくわん
くわんの根本中堂と平安堂一のみと乃と
はくわんこれを新とせん千載之書乃燈色と

かんとくわん心地と大凡道場の具をくわん御
次中よ乃とくわん條期有暇の事とくわん
海とくわん正西の間の小菊とくわん座とくわん
座乃東と又机とくわん多由経供養乃内
威儀師法經とくわんとくわん又
座乃とくわん礼盤二脚とくわん母座
くわんとくわん花燈明とくわん
香燭とくわんありとくわん仏乃御
とくわん又これ乃正西とくわん
をくわん唐錦乃并發とくわん金
舎とくわんこれ南とくわん敬瓶
乃机と

脚とをさすくまの糸よしをみこまをさ
るゆさるうた節落りをもみくくくく
くもはくかきひくくくく又新巻札の西一錦
此打表とる札とて顯文紗とてつり
佛布施とるる乃場内札かたより川鹿志
水ははらばらるるく東の形より西乃是二
板とてはく證義者札とて東上 同
南中一二乃間南水乃形よりみくくくこれ教
板とてはく僧綱の後師乃座とて西上
板とてはく末より始より月一板乃く
くくくく是二板とてはく凡僧の傳師

此座とて東上 南乃座北東乃南水乃形より同
是二板とて月一板とて是末より黄派乃是
とあく感義師乃座とて南上 座北前乃磬
量をきくゆかりとて法橋とてはくく是事と
るされと派官派位乃各僧位位位下よ
はく事いまい流例とてはくく東乃弘
庇乃正西北同南水乃形乃縁縁乃是板板
とてはくく座と守人板ゆき時表
く座の末東の形よりあくく南乃美
より東中三北同よりあくく黄派の是一
板とてはく山岳の次將の座とて東上 東乃美

子水東一乃同子向年一美子其南東一のり
そのく東鑑子とて是一収つと為く
凡右の堂童子其智とを陣に渡り南東
乃印水れに番書察給とく右邊陣
と衆僧乃集會取とく之殿慢とを掃
部控とく一掃以儀大臣古行乃云事
有り金これ以入一其上の建ハ法大寺其か
次中と依進也く去九三日の日時の
僧名とくあつてあさ其の月に出れ
く頭中の実警の位後毛とけむと
とく一其のれ是亭子とく心子冠を以

一あり出座取中其日時勅文あり心子僧
名と改しれいやく凡廿年宣秀と右一
てこれをくくく一而願文ハ奏議或ハ大
輔長直 草進一多た府之れを信去なり
凡これ信書古入本乃右筆累家其堪徳と
求られを拓家信記ありこれ人を其
人子信く事とく其元月を月輪殿
行時元應子後山本た府 實奉云 應安子是心
院園白所長云 應永子後三条入道相國
あつて其信書とく其れは治暦元年
九月御八海經信云 行時奉行職事 記云佛
其た中并

僧正 任丹 西室僧正 云惠以下國儀師 隆嚴と云
行きささるる遺戸乃皆脱と云なりて等子
赤いつるあゝ南東此と云くも正西乃同と
いりて各聲子に威儀師整と云くも云
口西岳木尚と云く惣礼咽以下と云く先聲の
并宣秀少幼言和長た右此堂 童子乃鹿
と云くも此書と云僧乃あ子と云く
道終て座子之徒不取書と云りて云く
乃机子と云く退りて西室僧正と云く清師と
高聲子乃あゝ表白れ此終て同者光竹
僧都高橋良 丹波子と云くみく申銀海此意申

乃と云く宗と云く又三編宗乃之法
此乃教主六達那釈迦乃申云く此と云く
多子問答割と云く此を沈義女人の鹿よ
もも那復生と云く此と云く此と云く此
以下易と云く六種回向咒歌之礼と云く事
行名ハ儀ありと云く此と云く此と云く此
と云く此と云く此と云く此と云く此と云く
正と云く此と云く此と云く此と云く此と云く
此と云く此と云く此と云く此と云く此と云く
と云く此と云く此と云く此と云く此と云く
乃此と云く此と云く此と云く此と云く此と云く

みこにれは乃紙とて心僧氣法原度れ底より
上東西より列立もるる次第はよきとて善と善
中より一とて南へ善戸 畏同 といて南
に善子のあはれに死に西より福とにけりて
又中流と居るるに机のりよ海よりて善
奄と返して後元次法僧死するて福を
く海中より退下後僧東階よりけりて善
善却善とて撤もるる座とをくらさ海より
く取の敏と平備よりけりて善とて福を
くみよと退く福とく夕死りて善とて福を
めよ上よりけりて善とけりて善とて福を
法師

議定不乃西に善子の通子仲立して善と
よきけりて善一人 善個 といて善とて福を
乃き心と上り事と善と善と善と及ん
やと善と上り事と善と善と善と善と
其後あり善子同夕死りて善師 実論
僧都 徳也 也控向僧教軍伴 南松院 同者に善
よつきて善といふと善といふと善といふと
新迦れ分力と謂て一と又法記月記卷
十地と何とてこれ善又漏善とつて
以薩師ハ唯密 密 乃師法よて取宗ハ地善也
あつて善と善と善と善と善と善と

て自らこれ概んじ甚きなりとて同者とて高
よ重とほくし除とあきく疑難とくし如也
陳善といふとすこりありたりとや

才二日 才七日 物産に豫師真寔已誦 與福寺住持字
生清律師

とる檀甲に家田家もて高僧とてむさふ
志よりなりや同者延藝大法師 東大寺住持字
信賢坊 也二宗

の聖者延壽法はと修とるのハ漏之漏乃
中小つとむとやと同又佛果に障ハ同位ハ智

とつと断とるやとて此漏ハ漏ハ人の法相
とてととととく之漏也と名ありとて若く
しる初喚はありとてとてとてとてとてとて

海とて佛果の障も同位の智も唯佛を佛

の境界ありん凡心俗通とて欲解とてとて

ありとて文とて句とて 唐立入 感悦

と生とてとてや證義乃障とてとて自ら

宗に義論ありとてとての難陳證議とて分

とては身とてとてとてとてとてとてとて

義 孟田僧正 信代乃名室とて時乃宿法あり

とて法中乃とて徹とて法教ありとてとてとて

任用僧正とてとてとて微弱乃以とてとてとて

めりありとてとてとてとてとてとてとて

毎度自家他門の給養とてありとてとて

心や殊懸蓋順手しけり當時の所作を
〜〜〜
賢人己備延暦寺住学堂
松福院 備却といふ心己備を
檀甲より松福院 檀甲より檀甲より檀甲より
大法師源榮延暦寺住学堂
実経坊 同者れ丹庭より〜
丹庭師者最初修觀の時慈悲二法れ申よりは先
いふ是と親より〜と問次より西方の弥陀如
來を報より應よりと教言より〜二種若
問題教刻の長座より乃慈悲心二法乃疑天台
一家れ親法と相違然れ子服より廣大深遠
あり義備〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

身一象の意則建立れ宗旨より 亦教中
これ門より注還〜と〜と〜と〜と〜と
禮と名目といふ依曇れ土といふ穀念を
之のゆゑ得れ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と疑備の智母文殊大士と
〜と〜と〜と留為那尊者を床と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
納言宣胤 冷泉中納言改爲園宰相基富 左
大寺宰相光忠 出右忠歌松殿 堂中納言 堂中納言
子守光冬光 右光俊
廿三日廿八日 あり〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

今此中日の終に御座修養あり
今此中日の終に御座修養あり
及菓蔬隨時恭敬與のり
及菓蔬隨時恭敬與のり
乃深世來いし
乃深世來いし
らんと殺害あり
らんと殺害あり
と也若略の儀
と也若略の儀
三回此御座
三回此御座

こゝろの
こゝろの
正西の
正西の
泉新中納言
泉新中納言
出右基春朝臣
出右基春朝臣
留仲
留仲
僧叡堂朝彦
僧叡堂朝彦

其の部成正覺れ仏と云ふ又法苑と云ふ
小乘乃益と云ふ如く又此部二かゝるを
乃義編同為るべし朝庭と云ふは
御経供養乃儀と云ふも勝院僧都先付
所よりありて表白乃後供養乃儀を述ぶ
御教文と云ふは亦此作昔れ目錄と云ふ
臨書を刻版し衆經と云ふ字と云ふ
くは此の如くせん切法乃林に引取書葉
乃又此の如くせん儒宗乃箋抄なり
乃錦句玉章と云ふは此の如くせん
乃錦句玉章と云ふは此の如くせん
乃錦句玉章と云ふは此の如くせん

佳城の如く此の如く一號一翠輦と云ふ
いさゝかと云ふと云ふは此の如くせん
ら乃人なる如くせん此の如くせん
此の如くせん此の如くせん此の如くせん
御守師の如くせん此の如くせん
慈の如くせん此の如くせん
慶僧正の如くせん此の如くせん
此の如くせん此の如くせん
西家僧正同者と云ふは月教の意に決定の業
を指しやと云ふは又御経の如くせん
と云ふは此の如くせん此の如くせん

慶の内蔵とくこく一白駒の教典とくは
御経佐意の守師と重難とくは
元應の玄智法不別勅也重難とくは
今又重難の事不也終とくは
一宗三論の深意とくは
答也又内教の妙理とくは
かた後毎復法乃二菩薩乃宗旨也
有り勝者なりとくは
元日 廿九日 著座也 信長大納言 實隆
源中納言 俊量 小倉宰相中將 季種 武
了大捕 長直 出右重經朝臣 保也 堂童子

長流 或戸於女捕 為学 五条信俊 也 證義三人著
所乃後心下凡衆僧次也 亦上例乃也
初慶の傳師源榮問者賢心也入皇玄門凡
等覺也かこり佛果乃位也わらり也也
次之月融也三諦有り勝者なり也
それ等夫台宗家乃肝心月教於位乃目
是なり也台也義深くも
身二日凡對梅也執氣と敬也
場乃わらり也我慢の情とくは
と生死也魔軍と志とくは煩悩乃惡賊也
日乃わらり也也

後師の存に違て三井為宗の問題と由州
よ童形より乃為宗遊よりとて多し
毛のらゆりていふもなる物も此れ
し〜〜〜次みゆりて楊梅桃李乃名
因縁よりと備しわきあるもいふ優美
りそとてえ〜次乃文女本通門乃教
慶生れ教満是とていふ〜やとて天
相承乃將來と一宗同ある〜言れ中延暦
園城れ多寺あり〜宗旨証あり
高位とていふ〜ゆりてある〜此
ゆり〜〜〜海、朝庭教訓と

〜〜〜此舟と義瑞はさゆり
て夏日極長乃節と夕陽斜照乃天
のいふ

才五日昔 御願今日結成あり
殿乃以装束等々あり急あり
明日朝日見御孫あり〜いふ
ん辰の刻りり〜皆泰也と勸修寺大納言
教秀 久我大納言 豊通 橋本中納言 云々
新中納言 實高 中院宰相
通世 出居〜いふ〜下實平 阿野少将 堂童
子實平為学あり 後師昨日乃夕膳乃

祿を多し給ふ證者三人乃各二と云々以悉
之れと云々平座各一山矣望 仰下復之在的
臣及在永康初臣在在在教の臣在在日記
宣秀二美千章一長少細言 友原資直
守光最末と次才よと云々御布施を
くをと云々れが證者後僧と云々云々
此一を云々云々一を云々云々云々
と云々云々云々云々云々云々云々
西向也 信侶乃凡僧云々云々云々
云々云々云々云々 事云々云々云々
退か抑禁中御八悔の每交に云々云々

乃云々五日十座の御云々云々中云々
云々云々云々云々天下 孫園乃事也母后
此御時云々云々也 毎云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々
御後百五十餘年云々云々御云々云々
孫園云々云々云々云々云々云々云々
期云々御傍親乃云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々

や又勅定よりわすしゆに院政河正海より
下知八条し志よりしりしりしりしり
月輪殿 平時右大臣 中しりしりしりしり
とるしりしりしりしりしりしりしり
事よりしりしりしりしりしりしりしり
何よりしりしりしりしりしりしりしり
正公弘儒正未う隆義乃先例よりしりしり
よりしりしりしりしりしりしりしりしり
とゆよりしりしりしりしりしりしりしり
ありしりしりしりしりしりしりしりしり
しりしりしりしりしりしりしりしりしり

とそゆより天曆御八條乃記とるしりしり
九条右忠相行事乃上り徳池公為人少
ゆよりしりしりしりしりしりしりしり
時身ゆよりしりしりしりしりしりしり
そ思至ありしりしりしりしりしりしり
大法師ゆり梅師八人れしりしりしり
て泰勅しりしりしりしりしりしりしり
駿言双乃名師観音大士乃化現よりしり
とるしりしりしりしりしりしりしり
道とゆよりしりしりしりしりしりしり
とるしりしりしりしりしりしりしり

その流りての類と日なり神をり記後を
こころつみされし心あり之れを
之れにありてと孫にれ物に將軍
をく之れに孝なり此御心ありて
心積る孝子に門ありて忠臣に
なれん君ありては人なり心
とそ此ありては一人なり
つるをさ此類字に乃ては此御
れらありて親王御方とて先
りて伏見あり仁和寺宮提丹あり
く月よりはこりては安祥とありて
今

正し川ありては山ありては
ゆつた乃御寺ありては
なるれりありては日ありては
龍宮ありてはを流るる下ありて
息に大府ありては後府ありては
右府ありては月ありては
小島のゆりありては
此乃東に美子ありては
事乃為人ありては
さそそそそそそそそそそそそ
やそそそそそそそそそそそそ

と堂々一花月乃風光紙類あり
志こころあり月と光の中仲も仲
三又乃天冬毎歳百子れ真あり
あり貴公子明日れ佳辰子雲而光
嘆わこころ紙をそ緒こころ紙れ
光あり風雅の感なりこころ紙れ
しこ明僕より来りれ陰晴をこころ
至廣亮より永夜乃吟嘯と嘯とこれ
そをこころ紙をこころ紙無りこころ
何家より破り所あり一紙乃腹葉とこ
と紙より家より皆教類れ嗜西紙のみ

里ら終わいづこ乃杜れ良材和子の
浦乃明珠よありこころやいゆこれそ
とじく物れをゆこころ紙狗のそ
そをこころ紙をこころ紙早懐とのあり
地乃紙をこころ紙をこころ紙

萩乃よれ露よれみり家我あり
こころ紙をこころ紙を月あり紙を
風紙をこころ紙乃下萩よりそ
こころ紙をこころ紙より月あり紙を
こころ紙をこころ紙を月あり紙を
月あり紙をこころ紙をこころ紙

か乃國人の名を尋ねのこゝろ
月れはしやあもあひりし

卷五槐實治の蘇中失妻和歌序

因

柳枝乃春好みよしの心まらふ
乃夕好あま終に清め
今の春をたて
時鳥のやまの月乃白袖
乃繁山如露松
伽如塔
朝光乃大好乃ありと思ふ
小章如大貳の妹あり床を恨

か
近
唾
し
歌

山
川
か
心
と
昔

藤西のや人のふ存好夢乃世に
おろきつゝいぬい出せしや
爰よりつゝいぬい出せしや
いぬい出せしや
いぬい出せしや
いぬい出せしや
いぬい出せしや
いぬい出せしや
いぬい出せしや
いぬい出せしや

我乃まゝに
志しつゝいぬい出せしや
いぬい出せしや
いぬい出せしや

コウ原の記跋

同

世一松を想箇載公乃述作也
下乃ん海くも愚老有りき
いぬい出せしや
いぬい出せしや
いぬい出せしや
いぬい出せしや
いぬい出せしや
いぬい出せしや
いぬい出せしや
いぬい出せしや
いぬい出せしや

ゆゑに御沙汰可なりと申す
御見付のことは此の書の中
に便直に申す可なりと申す
物と申すは此の書の中
に申す可なりと申す
此時懐中
感一作
多思
一乃作也
通
可なり

問題として此の書には
未付の文字あり
一筆乃私毛馬相如
と云ふこと
世より
と云ふこと
翰墨
喜此

世鏡抄序

釋青栢

宗比後唐一竹一松由一て善庵此二
字河仲和といふ友人乃能書よ如も勢
多も今事り竹りおまひいけぬ事よ
感懐清あすす

かーさーなまらうー海も築いん
まーさーらんらるゆあのをた

又宗補同く一世名号如唐筆とて勢
竹一入乃國よも思えいーらる事
おほい

あーんさーいよあまーららるあまーいん

らんぬもろあーさるあ入いりて

草庵乃う海四隣一も松花樹めさ
り前庵よ大らる巖あり階踏のーく
虎一細ゆり法きこの石あひまーらる
中よ紅梅新よをさありあーや好里よ
いさーららはーまーらるさぬ横斜
三宮文一しよよーらあさるよ升あ
綆乃なるも事物名相葉あほひて暑
避よぬがらあり四時の草草一本よ事す
是をもてあさひて晨夕志願するよ
書院を弄花軒と号す

多なるうらみは路をたどりあひらき
ふらふらと歩むる可き世なり

三愛記

同

ひらりせよひらりとの若くは儒教道に
形自給して九きれ中の心と
ひは乃あかき野に
水号一川から牡丹花を
かよひては物一鉢の
りわやほほの
と執一酒と愛して此三古は
と具上而大賢

とこれと用ひ村花小児も
るこいもや雙あや年
よき育の一刻と
く西人のゆきと
乃風をく
とこめ友草
よむらひ
糸の色
も
と鴨の
胡蝶の

波と濺のみなり香を沈水とゆへて山國
よ久し傳へ蘭奢侍紅塵中へ海ありとあり
き淡き香〜あえせけ〜もの毒母を花葉
新枕あをとり〜家〜い〜さたれ
秘方をも傳へ〜い〜孔ある〜と〜れ
夜雨同冬の梅は昼露の露和〜塵裏の
閑とあを〜み〜吟詠の和餘の酒あり
南蠻の味と〜み〜列の移りあき加列の
菊は天野のお群る心とあを〜濁露の
あ〜ま〜一酌の午爰と散〜或は言を〜
こ〜い〜して碎をけ〜〜れを〜て風を〜

けて舞ひ〜ら〜齡の〜と〜え〜ら〜と〜舞を
あ〜ら〜の〜と〜年あ〜ら〜め〜ら〜と〜柗建仁
寺れ正家知高の命と〜け〜る〜若也常菴
おほわ〜川好なり〜ら〜の〜酒と記〜路を
お〜ら〜の〜と〜〜と〜書〜と〜爰と
歌〜路〜つ〜ら〜辞音妙感歎ふ〜述〜と〜也
み〜あ〜の〜書〜と〜あ〜ら〜〜お〜し〜事〜と〜あ〜ら〜
書〜あ〜ら〜の〜と〜〜と〜慈〜あ〜ら〜〜と〜書〜と〜家
よ〜あ〜ら〜の〜と〜〜と〜慈〜あ〜ら〜〜と〜書〜と〜家
あ〜ら〜

雷れら〜西芳ら〜遊魚辞

多良義兵

永正八年十二月廿八日嘗にわしに孫也る
の孫也る馬とさしつらむらさきとて
しあつちの孫也る城のつらむらさき
さしつらむらさきとて西の寺の住
持也るつらむらさきとてつらむらさ
は敵のつらむらさきとてつらむらさ
らんやうよつらむらさきとてつらむら
もつらむらさきとてつらむらさきと
と見ゆつらむらさきとてつらむらさ
よつらむらさきとてつらむらさきと

て明子也るつらむらさきとてつらむらさ
れとつらむらさきとてつらむらさき

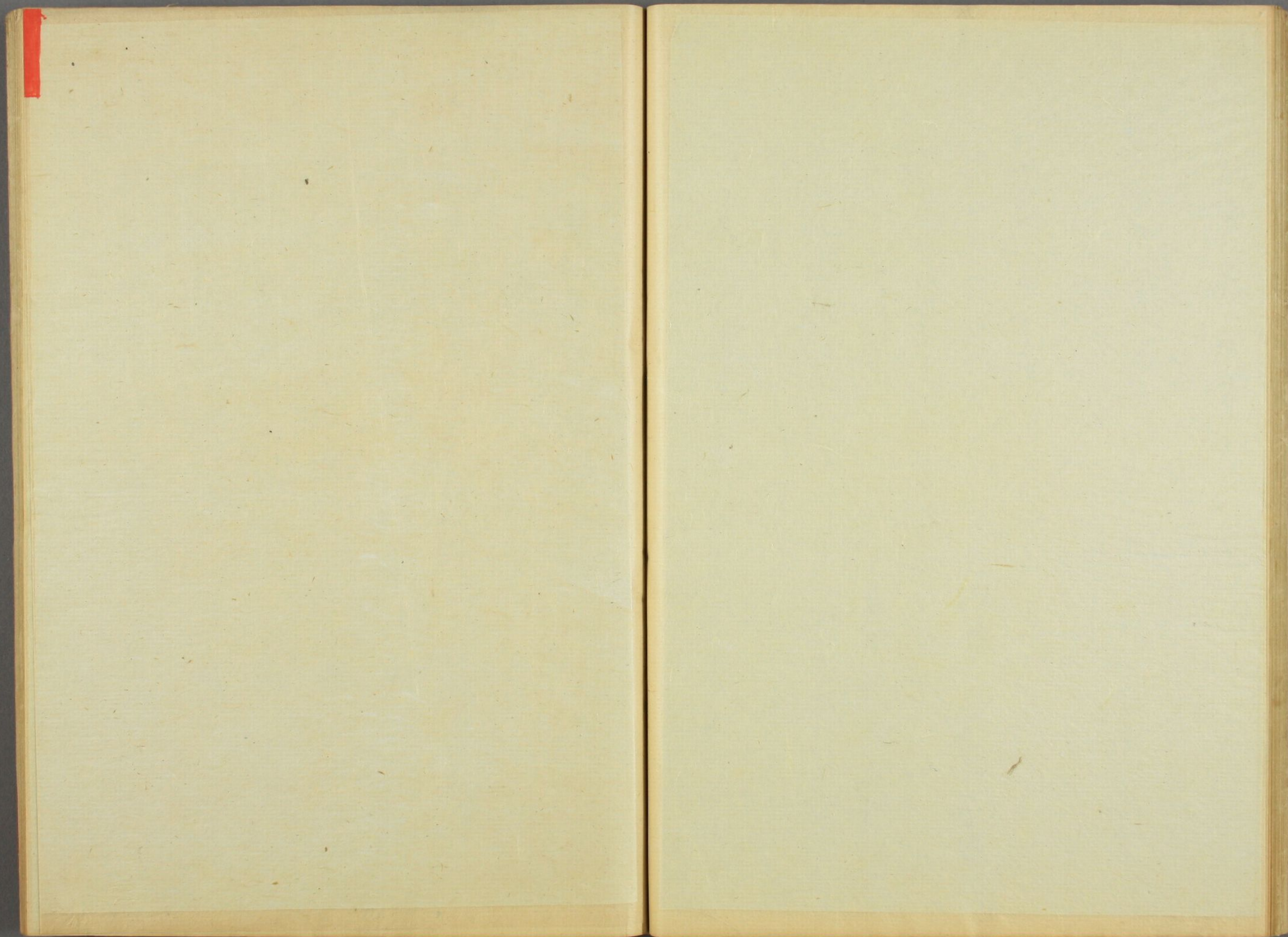
つらむらさきとてつらむらさき

菅原和長

廿一帖也る後の菅原和長とてつらむらさ
とつらむらさきとてつらむらさきと
つらむらさきとてつらむらさきと
二年正月廿九日辛酉天晴早且に在后
り春と今日より後光教院七回乃御
追告乃御也るつらむらさきとてつらむら
善哉法也るつらむらさきとてつらむら

惟后御共行あつさうしつ心傳く
清くやう志をく先神本六條あり西
其後御系内玉座しりつら御製
とありきりし此のちまわりの
ん然しる御筆のとり疑るれを
又は七月廿八日先皇御御尊三年めせ
いさまり是く林申すく憾はあつたり
是れ傳名をとるこれ共行乃公いと
是れ他人教記乃敏上人をく
いすくこれおちし是くとあつる御
をくもつるあつり筆の海は

いすくしつるしつるつるつる
乃きあつちみつるあつちつちつ
うあつちつるしつるあつちつ
うあつちつるしつるあつちつ
しつるあつちつるしつるあつちつ
しつるあつちつるしつるあつちつ
しつるあつちつるしつるあつちつ
しつるあつちつるしつるあつちつ
しつるあつちつるしつるあつちつ
しつるあつちつるしつるあつちつ
九月一日しつるあつちつ



扶桑拾葉集卷第二十二

目錄

物志 友原實澄

詠月和歌序 同

道賢法師自歌合跋 同

細川右京左史自歌合跋 同

中原遠忠自歌合跋 同

慰急議基綱以久事餘哀和分序 同

きぬのりき日記跋

名香全跋

信のり日記

春賢直輝和歌序

同 同 同 同

枝葉拾葉集卷第二十四

參議從三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

勅小志ささく教句をまの記

藤原實隆

さいのり内乃帝北沖要り先皇の沖代法
連歌者一ささく教句の肖相法神尸一ささく
有るは先法法覽者一記の一當代のれはを
事なり一ささく教句のりを記のい高彦中尸
魚一は歌乃らさくせん風情をまのりあく
経一約也やそ

あさく入心と改ま月とまのり

月う字たーととてのうせんー
 とりし歌とPととりや心強き結ぬるま
 ー流り作しむー六はもつろふと
 ちつろりけら半子天曆ハ此の切り
 ありてとぬーく柳本ハ造り足跡の所
 あり歌いすれもあらんもやより凡人のえ
 ふ可りーありともし凡そある可極みあり
 うかぬー相なりそ青雲思宸のあ
 入まらぬとらんあーハ傳野のま賢お舟
 样輔作のるを好ーあふハ非女も雲
 面妖艶の情とあれふきりーとあつら者

字ん今いと法陣のつれ詞と同えりきぬ
 之敷意とれらるーとんたふくと道
 候ちち半よん年らん夏産とよ
 事とつらとあふととハ識れ文と
 ませあわーくまけゆりーハ形もー
 候り文つらとれにむる記ーとろり
 ーとととらむもあけきる感悦もの舞
 是ハ端こしとととととと九月十日
 ハ初しありとつらとつらとつらと
 初しやとらとととととととと因す
 十日ととととととととととととと

とに輪の山を仰ぐ人十市一をのるは
のまを存る使を頼りて其の地を
けせ共くもまのあまのつるま
いさしり勝をばとさるしき
此糸のくろくしきさるしき
を難くを難くを争うしき
ともろの老のらるるを
あまの雅子詞及しき
少といを秋のらんを
のまのいと浪名山を
波の人もしき

るの池のいしき
何より池のいしき
流るるいしき
花をいしき

慰冬儀茶綱口失書餘夜和歌序

同

香山居士此柳枝と散りま
ねるし世にまはるし
雪をいしき
於一曲成感しき
とて其夜しき

印して置くこととてそまうしめしむる
わき法もふ今古人もまうしめしむる
あまうしめしむる印して置くこととて
しめしむる日とてしめしむる日とて
あまうしめしむる印して置くこととて

いぬりき日記跋

同

井上中納言の日記とてしめしむる日とて
くして置くこととてしめしむる日とて
印して置くこととてしめしむる日とて
それとてしめしむる日とてしめしむる日とて
世に傳へしめしむる日とてしめしむる日とて

あまうしめしむる日とてしめしむる日とて
くして置くこととてしめしむる日とて
印して置くこととてしめしむる日とて
それとてしめしむる日とてしめしむる日とて
世に傳へしめしむる日とてしめしむる日とて
あまうしめしむる日とてしめしむる日とて
くして置くこととてしめしむる日とて
印して置くこととてしめしむる日とて
それとてしめしむる日とてしめしむる日とて
世に傳へしめしむる日とてしめしむる日とて

乃のひよさらしあはれなり
れよの湯とていふやうに
さういふ人ゆゑにまじはるべし
はやくとみづへかゝる
今の故きをなすは
りまをさういふ
しと流るる目も
此記帳のまじはる
くらしとていふ
衣籠の御禮のあり
玉の衣籠より
拾新汲水のあり

さる新汲水より
まじはるるあり
きりきりとは
まよひとていふ
のこころを
のくしとていふ
波濤の御禮
程も見え
今思ふに
まじはるる
りまをさう

さうゆは 書くは 一冊の 西の 書
光景の せん
あはれ いくし こと 大なる 君の 光
は ちか せん せん せん せん

名番合張

因

蔚宗の 傳はく 已に 浩留の 港と ありし 也
流る け ぬき こと ありし けり 董 善 彦
我 志 入 一の こと ありし けり 董 善 彦
事 記 せん せん せん せん せん せん
と 記 せん せん せん せん せん せん

これ 甲 乙 あり なる 事 ありし 也
ゆえ せん せん せん せん せん せん
す せん せん せん せん せん せん
あ せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん
い せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん
は せん せん せん せん せん せん
み せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん

ありしは天照后よりありし
なりしはあはれなりしは
ありしはあはれなりしは
ありしはあはれなりしは
ありしはあはれなりしは
ありしはあはれなりしは
ありしはあはれなりしは
ありしはあはれなりしは
ありしはあはれなりしは
ありしはあはれなりしは

すふらとていふは
藤乃乃まよあはれなりしは
けえの院よりいふは
ありしはあはれなりしは
ありしはあはれなりしは
ありしはあはれなりしは
ありしはあはれなりしは
ありしはあはれなりしは
ありしはあはれなりしは
ありしはあはれなりしは

今縁起任信信中す方不龍より
何表の源とさしあはるは縁起とれりみ
ふれりらよらいつきゆ

しよ玉の源殿よりむるの源殿

〜〜〜

諸堂の縁起實存とて聖賢とてはく
深見宿縁深〜〜方〜〜く
吾臣より河部〜〜れりみ奉りて
〜〜〜〜〜縁起とて深く
ち替〜〜〜〜〜縁起とて
上人不絶念に物あり

と浅くと感〜〜源とあり〜ゆりぬ
井の縁起掘〜

〜〜〜縁起とて
〜〜〜縁起とて

一初高道におあり〜縁起とて
縁起とて〜縁起とて
〜縁起とて
社〜縁起とて
〜縁起とて
〜縁起とて
〜縁起とて

乃こころの道なきこと

此の向ふは恒昔よりしりぬる事

いふ事なき事思ふ事なき事

和泉の地はゆりゆりなる事

乃ちこれありしこといふ事

之をのりあり教松本といふこと

てこれをもせりつねにねの事

いふ事なき事思ふ事なき事

あつた事なき事思ふ事なき事

あつた事なき事思ふ事なき事

南原まゝの道なきこと

とてあつたゆり愛宕の事

屋敷の事ありしこといふ事

寺にもゆりゆりありしこと

愛宕の事ありしこといふ事

亦二日高野の事ありしこと

いふ事なき事思ふ事なき事

されしことありしこといふ事

なすらしき事ありしこと

いふ事なき事思ふ事なき事

いふ事なき事思ふ事なき事

大鳥乃社信田敷たしき事

血乃涙と也ぬしそらみみ

覺鍛上人の詠平小夏の中の夏とら
と夏るわさ夏るも夏るらと夏一
中とらつる續後拾遺集に入らるわさ
あし事と

いづさうんらつととら七中入

いづさうんらつととら七中入

實相院とよあよつととら七中入
わさつとら程袖入落とら
あし事とらつとら七中入
あし事とらつとら七中入

あし事とらつとら七中入
らつとら程袖入落とら
あし事とらつとら七中入
あし事とらつとら七中入
あし事とらつとら七中入
あし事とらつとら七中入
あし事とらつとら七中入
あし事とらつとら七中入
あし事とらつとら七中入
あし事とらつとら七中入

松川乃水とらつとら七中入

あし事とらつとら七中入

その身を思ふ屋戸を想ひし
らむとあはれよしの寺の鐘音はほろろと
しき事あるとたほしあしきら
紀伊の川とて

水よりあはれいふも紀の川を
あはれいふもあはれいふも

川とていひつゝにあはれいふも
とていひつゝにあはれいふも

いふもあはれいふもあはれいふも
いふもあはれいふもあはれいふも

勢との聲とてあはれいふもあはれいふも

いふもあはれいふもあはれいふも
いふもあはれいふもあはれいふも

いふもあはれいふもあはれいふも
いふもあはれいふもあはれいふも

けみら
十八町
後子
国徳法所

戯

あはれいふもあはれいふも

結ぬるあはれいふも

あはれいふもあはれいふも

しく高き山に雲の影をうつりて
風身とまじりて霞の如く
あはれなる心も
てあり

老い故より心とて
あはれなる身とて
からしむ風とて
山より降りて
よきこと人の心
あはれなる

高き山に佛は僧の聲と

海り雲の影をうつりて

女甲の影をうつりて
又塔の影をうつりて
あはれなる心も
あはれなる心も
あはれなる心も
あはれなる心も

今いふはまら焼やちしる舞
あはれなる心も

奥院のまら焼やちしる舞
あはれなる心も

事とて三玉侍りて教白とて頻りし
侍りて筆を海にまき

郭公かく詠しつる形を深山くね

系くてされと云取のまをさし道より入
きまうて入宗珣志多うてひねるやま
ふくはれおとさうけつた家えりつうふ
あま高師深の杉原の志さ天孫の社
まのよふとさし

神人ふりし松吹風やあまをこれ

たしはる海の名さともま

言りてまうりて塔よりつら

廿七日のまをさしつらまをさし系解の

密あま一臺あし侍りき

廿八日古阿波院より松佳ありつらま海り

向く大師の心徳久年才天を侍見言

くあまらうれさす風名よの夕つま

つはりて塔よりまをさしつらま海り

系つらま高師系より海りてまを侍系

乃そこれ事とてまをさしつらま海り

いしつらま

廿九日高師系海り前より女首冠とく

あまをさしつらま高師系海りつらま

と木がいにあはれしはゆり橋の石好しりあも
たつとよりあなり大江殿にわたりて海
よいよも松の縁に尺くしゆきよ

あしきとくさるうたせの海に心あ
大江の松にたる人もうな

子にわたりてあなれらにひりく
たつともいふはあきまにせし
せうと

橋よりらゆりぬりたえやふし

こころいふはあきまにせし

あしきとくさるうたせの海に心あ

乃塔流よつとてあはれ日あたらふ
あしきとくさるうたせの海に心あ
小まにりてあはれを念痛しそ
あしきとくさるうたせの海に心あ
あしきとくさるうたせの海に心あ

養賢直郷和歌序

同

す紀よりあはれしはゆり橋の石好しりあも
たつとよりあなり大江殿にわたりて海
よいよも松の縁に尺くしゆきよ
あしきとくさるうたせの海に心あ
あしきとくさるうたせの海に心あ
あしきとくさるうたせの海に心あ

海より一は海にありて海に可なり
海にありて海にありて海に可なり
海にありて海にありて海に可なり
海にありて海にありて海に可なり
海にありて海にありて海に可なり
海にありて海にありて海に可なり
海にありて海にありて海に可なり
海にありて海にありて海に可なり
海にありて海にありて海に可なり
海にありて海にありて海に可なり

先づ一を去りて一を去りて一を去りて
一を去りて一を去りて一を去りて一を去りて

扶桑拾遺集卷第二十四終

